2022年6月12日 川越教会

丸山　勉

まだ見ぬ教会へ

［コロサイの信徒への手紙1章24～2章5節]

今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

わたしが、あなたがたとラオディキアにいる人々のために、また、わたしとまだ直接顔を合わせたことのないすべての人のために、どれほど労苦して闘っているか、分かってほしい。それは、この人々が心を励まされ、愛によって結び合わされ、理解力を豊かに与えられ、神の秘められた計画であるキリストを悟るようになるためです。知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。わたしがこう言うのは、あなたがたが巧みな議論にだまされないようにするためです。わたしは体では離れていても、霊ではあなたがたと共にいて、あなたがたの正しい秩序と、キリストに対する固い信仰とを見て喜んでいます。

[１]　信仰とは、「Life」

キリスト教信仰とは、ただ信じることではありませんね。信じて、生活すること、生きることです。「Life」という英単語がありますが、あれは「命」という意味と「生きる・生活する」という意味とがありますよね。キリスト教信仰は、イエス・キリストという「命」を私たちの中に頂くことですが、それは私たちを「新しい生活」へと押し出して行くのだと思います。私たちが「バプテスマ」を受けた（受ける）ということはそういうことを現していると思います。これまで自分の思い・欲望に従って生きて来たその生き方を、自分を本当に愛して下さっている神様・イエス様に委ね、神様のものとされて生きてゆく。確かに表面上は変わらないかもしれませんけれども（実際変わらないでしょう）、自分の「実感」以上に、神様の側の事実として、新しい霊が注がれ、「新しい人」として生き始めることがスタートするのです。イエス様は「水と霊によって新しく生まれる」とヨハネ福音書の3章で語っておられます。

その意味で、キリスト教信仰というのは、頭だけのことではなく、「生活する」ということ。具体的には「主の交わり＝教会」を形作ってゆく、ということと切り離すことが出来ないことだと言えると思います。私は若い頃、バブテスマを受けていながらも、恥ずかしながら、信仰というものは、個人的なものだと思っていて、かなり頭でっかちだったように思います。奉仕も自分の好きな奉仕だけをするような時もありましたし、説教を聞いても、その中で聴き取るべき言葉を虚心坦懐に心開いて聞くよりも、どこか斜めに聞いているような時が結構ありました。そのような時は不満とか呟きばかりが多かったように思います。

けれどいつの時だったか、赤塚教会で旧約聖書 『ネヘミヤ記』からの説教だったと思いますけれども、バビロン捕囚後の神殿再建というテーマですが、皆が心を一つにして汗をかいている、そこでただ呟くだけであったら新しい歴史は始まらないし、足をひっぱることになる、というような話に、自分のこと・自分の罪深さが指摘されているように思ったことがありました。あれは私にとって、聖書の語りかけを新しく聞くという体験でした。そうなのです。聖書の言葉というのは、慰められる言葉も沢山ありますし、それで癒される経験もとても大事ですけれども、自分の隠された部分に光を当てられる、それを受け止めてもう一度神様に立ち帰って行くということが、本当に神様・イエス様との関係を深くしてゆくことだと思うのです。信仰とは、頭だけではない。Life、生活ですから。

［２］ キリストの苦しみの欠けたところ？

今日から、パウロ書簡の一つ『コロサイの信徒への手紙』を見ていくことになります。これも大きな導きだと思います。コロサイ教会というのは、ユダヤ人たちもいましたが、多くはそれ以外の外国人たちからなっている信徒の群れでした。ただパウロはこの教会・信徒の群れにまだ対面していなかったようです。ただパウロの仲間であったエパフラスが伝道して主の交わりが作られ、そこでの交わりの様子が、先生であるパウロに伝えれてきました。それを聞いたパウロが、まだ見ぬコロサイの信徒の群れに宛てて書かれた手紙ということになります。パウロはまず何よりも、このような交わりが作られていることを神様に感謝しています。それが1章3～6節に記されています。そしてその後私たちの信仰の核心であるイエス・キリストについて圧倒的な大きさで描きます。13節以下を少し読んでみます。「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。」

当時、‟イエスは人に過ぎない”という思想が入り込んできたので、パウロはここで、信仰の共同体に目を高く挙げさせようとしていると思います。教会とは、世の中のサークルとは決定的に違うのだと。この地上の教会は、たとえどんなに貧弱に見えても、それは、創造者なる神とイエス・キリストが頭となっている、この世とは次元が違う共同体なのだと言っていると思います。

ただ、その上でです。パウロは「苦しみ」とか「労苦」とか、そのようなことを今日読んで頂いたところでは強調するのですね。特に驚くべき表現があります。1章24節です。「今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。」―特に「キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています」とあるこの言葉は、少々傲慢にも聞こえます。「キリストのお苦しみは不十分でそれをパウロが肩代りする」ということですか？と問いたくなります。でもそういうことではないのでしょう。イエス様は、神様に捨てられるという、想像を絶する十字架の苦難をを受けられたお方です。本当のどん底を知っておられるお方です。私たちが経験する苦しみや悲しみは、すべて神の子である主イエス様が私たちの経験以上に身に引き受けて下さったのですから、それに欠けがあるということはない筈です。ではどういうことでしょうか？

私の今の理解でそのことを語る前に、ここでパウロが直面していることは何かと言うと、この教会の交わりの根っこが、入り込んできた異端的な思想に惑わされて腐りかけている、ということです。教会の交わりの根っことは何でしょうか。2章の6～7節です。お読みしますと、「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかり守って、あふれるばかりに感謝しなさい」。根っこはキリスト。そこに根をに下ろしなさいと。8節にある、今あなた方の中に横行している「人間の言い伝えに過ぎない哲学」、「むなしいだまし事」の虜にならないようにとパウロは心配しています。彼はまだ会ったことのない教会の人々のため、真剣に悩んでいます。教会がもし耳障りの良い言葉になびくのであれば、キリストの十字架や復活が無駄なことになってしまうではないか。ちゃんと立ち帰るべき所に立ち帰って欲しい！と、パウロは、恐らく獄中から手紙をしたためる程に、本当に心痛めていたのです。ですから、「キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています」と。…私はこれは、主の交わりが崩壊していくことの苦しみではないかと思います。イエス様はある意味、教会を私たちに託されたのです。今イエス様は、天上で執り成し祈って下さっていますけれども、地上の教会の苦しみは、イエス様が残して下さった私たちへの宿題、苦しみではないでしょうか。だからパウロは苦しむ。喜んで苦しみを引き受ける。愛に苦しみは付きものですよね。子どもとのことも、親との関係も、夫婦の間も、苦しみのない愛はないのだと思います。その最たるものがイエス様の十字架ではないですか！神の子でありながら貧しい人の姿を取られ、罪人のために命を惜しまない、血を流すほどの愛ですよ！聖書は言います。「ここに愛がある。まことの愛がある」と！

［３］ それゆえ、共に苦闘して行こう

週報にも書かせて頂きましたが、この手紙の2章1～5節の言葉は、このコロナの時代の私たちの教会に対する言葉ではないかと思えて仕方がありません。

「わたしが、あなたがたとラオディキアにいる人々のために、また、わたしとまだ直接顔を合わせたことのないすべての人のために、どれほど労苦して闘っているか、分かってほしい。それは、この人々が心を励まされ、愛によって結び合わされ、理解力を豊かに与えられ、神の秘められた計画であるキリストを悟るようになるためです。知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。わたしがこう言うのは、あなたがたが巧みな議論にだまされないようにするためです。わたしは体では離れていても、霊ではあなたがたと共にいて、あなたがたの正しい秩序と、キリストに対する固い信仰とを見て喜んでいます。」

コロナが長く続き、この後、全国でかなりの数の教会が立ち行かなくなるのではないかと言われています。教会から離れてしまう人も少なくないのです。私たちの教会が教会であり続けるために、ご一緒にLife、苦しみを共にして行きたいと思います。私たちは強くありません。弱い時は必ずあります。そのような時はお休みください。そして、今自分は教会を支えられると思った時は支えて頂きたいと思います。皆様が招聘した牧師をも励まし、協力し、また祈って頂きたいと思います。前任の加藤先生ご夫妻は本当に祈る方でした。私たちも加藤先生ほどにはまだまだ成れていませんが、毎日、皆さんのことを覚えて祈っています。私たちは既に、イエス・キリストの霊によって余すところなく満たされているのです。この地上を超え、やがて私たちを一人残らず迎えて下さる「キリストの日」に向かって、希望をもって歩んで行きましょう。お祈り致します。

神様、「教会」がこの地上に与えられている大きな憐みを感謝致します。大きなキリストの教会の一員として生かして下さい。主の御名によって。アーメン。